嬉泉の新聞

・嬉泉の新聞／第27号／１９９４年（平成６年）３月発行（年３回発行）
・発行所＝社会福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋 1－30－9（〒156）
TEL 03－3426－2323
・発行人＝石井哲夫　・編集人＝友田篤

介護をめぐる最近の話題

橋本正明

「介護」を考える時にイメージするのは具体的には直接身体に触れながらお世話をする「介助活動」であろう。そこで医療領域の看護との関係が取りざたされることとなる。

看護と介護を別の専門領域の人間生活援助活動と考えるか、看護に介護は包括されるものであるか、あるいは看護とは介護に含まれる概念であるかという論議はつきない。

私はこのような論議は甚だしく不毛の論議だと思っている。なぜならば大切なことは援助を必要としている人の側から考えれば看護も介護もなく、自分自身の尊厳ある自立生活が重要なのであって、専門職間の領域争いなどに何の意味もないからなのである。

「自立生活」への援助活動、このことを可能にしていく働きこそ、これからの介護・福祉サービスの最も重要な上位概念として位置付けていくことが大切だと考える。この上位概念の確認により、福祉実践として看護・介護を含み様々な専門職が対等の立場で連携できる条件が整えられると言えるのではなかろうか。利用者中心の具体的な働きが今、介護・福祉に求められているのだと思う。

自立生活の援助には個別的な援助計画作成が必要になる。経験主義的に一方的に「してあげる介助」だったものから、援助を受けるそれぞれの人に応じて、自立に向けた援助の個々の到達目標と、その達成プロセスを明確にし介護を実践していく作業こそ求められているのである。それがケア・プランニングが必要となる理由である。

特別養護老人ホームが介護・福祉の専門施設と位置付けられるためには、この一連の援助プロセスの確立が重要なその専門性レベルの判断基準となるのである。

特養・老健施設のサービス評価基準が公的に示されている。大切なのはそのサービス基準に原則を明示している点だといえよう。その原則は以下の３点である。

ａ．自己決定の原則　これは言葉を換えれば生きることの自己責任の確認とも言える。往々にして高齢虚弱化すると依存的な生活態度になりがちである。介護者側も一方的な世話により本人が出来ること、しなければならないことまでしてしまい結果として主を依存的にしてしまうことが多い。

ｂ．残存機能の開発　してもらうこと、してあげることが介護ではない。自ら生活出来るように努力し、援助者は主が主体的に生きることを支援することが重要なのである。この機能の開発は主の意欲にかかわる。そこにまた介護・福祉の切り口がある。

ｃ．生活の継続性　施設にとってこの問いかけは重い。施設が施設であることを自己否定し、これまで当然としてきた集団生活モデル、いわゆる施設臭さを家庭の延長としての視点で再検討・再構築していく必要があるのではなかろうか。そこに未来の介護・福祉施設の将来を見たい。

「個」の再確認、そして「ＱＯＬ」こそ介護・福祉のキーコンセプトなのである。

（至誠ホーム長）

施設経営の創造性（その十八）

石井哲夫

今の社会福祉施設に何が不足しているかと考えてみると、個性的な活力ではないかと思う。よく民間施設は、先駆的創造的開拓的と言われ、そこを買われているような感じで持ち上げられることが多いが、本当に創造的で開拓的な施設がこの節見当たらないようである、それもそのはず今までは、ギリギリと施設に対して行政の締め付けが強く、民間施設が創造的になれない状況に置かれていた。私などもよくへまをやってはお役人様からしかられるが、知らないものの強みというか、無鉄砲というか、かなり行政からみるとはらはらすることをやっているのではないかと思う。しかし、最近行政が変化してきて、民間施設に対しての風向きが変わってきたように思えるのである。この間も東京都から監査を受けたが、監査をこの20年来受けてきて、今回初めて、指導監査とはこういうものだと言う感じを受けたのである。これは、おそらくこの事は、指導部長の力が与ること大と聞いているが、こうでなければ民間の活力は湧いてくるものではない。だいたいが民間施設に勤めようなどと思う者は、その処遇に携わることを目指している者が多く、経理や庶務のような地味な仕事をはなからやろうなどと言うよい心がけの者は極めて少ないのである。そういう中で、園長自ら管理業務の先頭を切っていくことになる。従って、何人かの中枢管理者群を形成する間は、経営の活力などは目にすることもできないのである。

それも経営努力が見えてくるような行政の規制緩和というカンフル剤が必要だし、時には、その施設のC・I(Corporated Identity)と権利主張が求められているのである。こう言うと叱られるかもしれないが、労働組合が強い組織力をもつ所以がわかるのである。しかし小集団と言うべき社会福祉事業の現業においては、労働組合では、創造的な現業を形成するわけにはいかない。それは、当然であって、職員の専門性の確立というフィロソフィまで背負うわけにはいかないからである。とするとそれは、いわゆる企業努力にたとえられるような生産的な努力を考えなければならないわけであろう。つまり規制緩和という行政側の努力に応える現業側の生産努力というものなのであろう。社会福祉事業は、生産機構をもつものではないから当然ながらサービス性というべき内容を向上させることになるわけである。このサービス機構は、評価されるべきものであって、これは、競争原理によってその内容を向上させるべきものなのである。社会福祉事業を競争で行うことには抵抗があろうが、サービス性を形成していくためのフィロソフィなるものが必要になってくるのである。このフィロソフィなるものが厄介なもので、職員の大多数が納得していくものでなければならない。職員たちは、どちらかというとフィロソフィは、お嫌いで、自分たちの生活に関わる実利的な考えや、センチメンタルな人類愛のようなものが好きなように感じられるのである。社会福祉の厳しいボランタリズムよりは、当節は、人権思想と言うか、実利的な自由否定できなければ競争原理を否定するわけにはいかない。現に保育所などでは、民間の保育所が新しい特別保育事業を行おうと言う傾向がみられ、公立保育所には、その傾向が少ない状況が現れはじめている。このことは、民間保育所が生き残るための自己主張を始めたと考えるべきでありその必要のない公立保育所においては、経費を増加させてくれなければボランタリズムの強要と受けとめることになるのである。

社会福祉事業の競争原理が行き着くところは、対人援助サービスに関わる価値観の確立ということになるのではないかと思っているのである。その点民間施設のサービス競争は、利用者観から始まる援助観を確立していく競争であり、それに向けての価値基準をどのように洗練させていくかということになると思っている。ただ、沢山食べさせて、おしゃれをさせておけばよいというものではないし、ましてすべて、芝居がかったクライエントの発言重視などと言う安易なものではないと思っている。よく障害者を話せさせて、フォローしないやり方がそれである。今後は、この点を追求していきたい。

私たちのしごと

須藤福祉センター各事業所からの報告

赤塚ホームについて

金沢　裕子

赤塚ホームは、板橋区の赤塚福祉園の二階部分にあって、定員六名の生活寮と、定員二名の緊急一時保護の二つの事業を行っています。生活寮は、福祉作業所、福祉園、一般の会社等に通って収入を得ている人達が生活しています。

四月からのホームの仲間との関わりを振り返ってみますと、かれらにとって、仕事を続けて行く時の意欲を維持し続ける際の苦労や仕事仲間とのやり取り、気持が不安定になった時の対応、更にこの不景気の煽りを受けて仕事の内容が変わる等、様々な大変な状況があった様に思います。そうした中で利用者の人たちが、気後れしたり緊張したり滅入ったり不安な気持になったりしている事を感じた事です。

しかし、そういう流れの中にあっても赤塚ホームでは次第に和気あいあいとした空気が流れ、家庭的な雰囲気になって来ています。無口だった人達も、自発的に失敗談を話したり、仕事への意欲を見せてくれたり、自分たちの力で月一遍のホームパーティーを企画するまでになって来ています。

緊急一時保護については、開始当初は肢体不自由の方の受入れの設備等が不備であったため、急遽、介護用浴槽、ウォシュレット、畳等を設置し、受入れ態勢を整えました。

緊急保護は、利用される緊急性を要する御家族の方への援助も当然の事ながら、何よりもまず利用される御本人が、家族と離れて不安を抱かずに、安心して過ごせる事を第一として考えています。その為に、緊急保護の利用の際の環境調整、食事、その他の生活面、運動面、人とのコミニュケーション等の点で的確な受け入れが出来る様、配慮に努めています。

生活寮、緊急一時保護共に、今後も、御本人達の気持ちを尊重しながら、学ぶ姿勢を忘れずに、すすめて行きたいと思っています。

（赤塚ホーム世話人）

楽しみなカラオケパーティ

子どもの生活研究所改築基金御協力有り難うございました

栗原利治様　西井冨久子様
綱川省三様　大久間展樹様
賀戸文彦様　中村二三男様
福田正蔵様　福田冨美子様
桜井節子様　小林一二三様
日向宏之様　立石新一郎様
土谷　新様　岩永隆男様
山口　潔様　田中禮子様
原田知道様　中西健一様
湯浅　正様　浜園利夫様
藪下恵子様　山本博明様
野村久子様　菊谷圭司様
大原俊二様　村田　操様
二木俊彦様　吉原勝彦様
田村聰達様　原　伸様
井出守安様　飯田栄紀様
平川正夫様　子安　昇様
藤本勝彦様　工藤成一様
村岡精一様　野田康成様
黒林　正様　納土彌雄様
横溝四郎様　益田英則様
竹原直之様　重田真澄様
竹内靖夫様　清水　弘様
松井吉弥様　館　裕様
荒井恒夫様　田村　匡様
穐山隆勇様　早瀬　進様
竹田　健様　斎藤　穂様
菊池正明様　（順不同）

（平成六年一月三十一日現在）

≪寄稿≫

福祉、心、行動

袖ヶ浦・昭和保育園
園長　杉谷　健一

昔から一口言葉で、〝老人、女、子供〟、と申します。〝頼りにならない者〟、〝手のかかる弱いもの〟、〝世の中や家庭の片隅に追いやるべき者〟といった偏見を多分に含んだ言葉です。

今日、行政面では以前と比べ格段の処遇や理解の改善がされた向きもあるのですが、本質的な本音の部分ではどうであろうか？と時々思うことがあります。

選挙ともなれば被選挙人達は、国会議員、首長、市町村議に至るまで〝福祉、福祉〟の大連呼ですが。当選後、その政策がフォローされた話はあまり聞かない。敬して遠ざけるのであろうか？彼らの心の貧しさを思う。

福祉は恩恵ではなく、共に分かちShareし、共存することだと思うのだがどうであろう。

聖書を見ると、キリストの側へ幼児達がにじり寄って来るのを、〝邪魔だ、ここは大人の世界だ〟、とおしとどめようとする弟子達をたしなめ、〝天国（至高、至善、可能性、生命、究極の場）は、この者達の如くならねば入ることは出来ない。幼児が私のところへ来るのを止めてはならない。〟とおっしゃっておられます。そしてキリストは御自身、病める者、悩める者、飢えたる者の友として連帯しておられるのです。ここら当たりに福祉の原点はあると思うのですが、どうでしょう。

横並び、水平思考、それらが無理なく出来なければ真の福祉とは申せないでしょう。

理念で終わってアクション前向きの行動がなければ画に描いたボタ餅でいただけません。

昔は弱い立場の人々を押し込めてばかりませんでした。でも、最近は少し変わったでしょうか？しかし、真物（ほんもの）というには程遠い現実のようです。シルバーシートを占領してゆずらない若者達等を見ると〝未熟な育ち方をしているな〟、と言わざるを得ません。

欧米を旅行して来た人は皆一様に老人やハンディのある人達が嬉々として実に自然に何処へでも出かけ自由に振る舞っているのを見て驚いて帰ってきます。暗さがないのです。

手を貸す人もさりげなく当然の事としてヘルプします。社会的弱者と私達が決めつけるその人達の中に豊かな可能性と生命の輝きを見いだすから喜んで共生しようとするのでしょう。私達も最初は真似でも、やがて真物に育てば結構なことです。形から心に入るということもあります。〝福祉の心は何心？〟なのでしょうか。お互いが貸し借りなしで共に生かされたいものです。人の間に落差とか、段差が無くなれば、そして自由な心の交流ができれば、そこは地上天国と申せましょう。現実には、それは努力目標でありますが、目指したいものです。

私にとって福祉施設で働く人々は聖なる存在、尊いものに映ります。

職員の思い

貴重な職場

須藤　朋子

私は、自分の弱点や、欠点を指摘されたり、批判されたりすることをとても恐れていて、出来れば触れられずに過ごしたいと思ってきました。指摘されてしまうと、落ち込んで、なんとかしなければ…という気持ちと、どうにも出来ないという気持ちが引っ張りあって、そして這い上がれずに、苦しい思いをしなければならないと思うからです。そういう気持ちに陥った時、いつも私は仕事を辞めたいと思ってしまいます。そして家に帰ってシクシク泣きます。泣いた後に辞めた後のことを考えます。やっぱり福祉の仕事をしたいと思います。すると、とても憂鬱な気持ちになります。なぜならばこの〝嬉泉〟という場所ほど、〝人の気持ち〟を大切にし、読取り、働きかけ、気持ちに添って人と関っている職場があるだろうか…という不安にぶつかるからです。自分の思い通りにいかなくてイライラして強制してしまったり、一方的に決めつけて叱ったり、そんな保母さんや、学校の先生や、母親や、寮母さんや、福祉職員が、今振り返るとたくさんいて、そしてなにより自分自身がそうであったことに気付きました。誰と関わっていくにあたっても一番大切なことは同じだと思います。貴重な職場です。泣いている暇はありません。一日一日が惰性にならぬよう日々精進してゆこうと思います。

（高島平五丁目福祉園指導員）

地域に支えられて

『相心和』

高木正三

高木さんは、現在、板橋区の身体障害者福祉協会のお世話をされ、板橋区の福祉功労賞も受賞されています。一方、福祉園に隣接する都営六丁目アパート自治会の会長として、園の催しの際などは地域をまとめ様々な面からご協力くださっています。先日も、クリスマス会のときには、奥様と共同で本物手作りの大きなリースを作ってご寄贈くださいました。おもちつきの会には近所のご婦人方と皆で一緒に作った、たくさんのかわいいお手玉と、お人形をくださいました。

福祉園には、ほぼ毎日のように顔を出してくださいますが、そのような高木さんと接していると、何か自分の中に勇気が湧いてくるような気持ちになります。大変お洒落な方でもあり、ここでは〝大久保彦左衛門〟の異名をとるそうです。

ことし、一月三日で満八十六才になりました。いま大変立派な赤塚福祉園の建つところはその昔あたり一面のさつまいもと麦の畑でした。その後、小さな広場ができ、近所の子供たちを集めてはよく野球をしたものです。私は小さい頃、右手が不自由で、なんとかこれを克服してやろうと野球に夢中になっておりました。そのうち、子供たちに教えるようになったのです。福祉園は実に忘れられない土地（ところ）です。

昭和六十二年の事、高島平に福祉センターができ、館内の売店を任されることになりました。いつしか買い物ついでに利用者の相談にも応じているうちに（私設の）相談所のような格好になってしまいました。そこで病死したお年寄りの為に葬式を出したり、「老いらくの恋」の仲人をつとめたりと目まぐるしい毎日をおくりました。障害者の団体の理事をつとめさせて頂いたり、旅行、舞踊など様々なクラブを作ったりと今に続く活動もこのころからのものです。

私の思う福祉との出会いや関わりのなかで「相心和」とは私なりの信条です。しかし、今だにこの境地には至りません。まだまだ味わいがたりません。赤塚福祉園の方々に接して、さらにこの思いが強くなります。

日常散歩などしておりますと、朝夕、また公園などでも、実に元気で生き生きとしたお子さんたちの笑顔に接することができます。私が「よう元気か。気をつけなさいよ。」と声を掛けると本当に嬉しそうな顔をしてくれます。その人の心に手が触れられたような思いがします。園の行事のときなどはなおさらです。いつしか、私の散歩コースに福祉園が加わり、しょっちゅうお邪魔するようになりましたが、お子さんたちも園の先生がたも気持ちよく迎えてくれます。

私には今密かな夢があります。来年の赤塚諏訪神社の本祭りのときに、是非伝統のお御輿と山車を福祉園に招きいれて、地域の子供達や大人、園の方々が共に楽しむ機会を作る事です。そういう機会を通じて、もっともっと福祉園の懐に飛びこんで、深いつきあいがしたい、お子さんたちの笑顔を見たいと思っています。

手作りのリース　受付嬢と

嬉泉の出来事

〈子どもの生活研究所〉

新しい通園バス

今まで使用していた通園バスの老朽化が進み、そろそろ新しい通園バスが欲しいと思っていたところ、中央競馬社会福祉財団及び東京馬主協会の助成金により、通園バスを購入することができました。購入に際して、主に小さい子どもたちが利用するものだから何か可愛い目印になるものを付けたいという意見が出て、子どもたちの好きなものをデザインしました。

新しい通園バスになってから、通りかかる子どもたちを見ていると、全然気付かずに通り過ぎてしまう子、一瞬チラッと見て通り過ぎるが、ハッとして後戻りしてじっくり見る子、ニコニコ笑みを浮かべながら見てくれる子、それぞれ違ったリアクションがあります。そういう表情を見るたびに通園バスを新しくすることができてよかったなと思います。（岩下　哲也）

『いっぱいの収穫　ありがとう』

「先生！見て！見て！」両手に余る程の大きなおいもを持ってニコニコしているMちゃん、「ワーあった！」尻もちをつきながらもしっかりおいもをかかえているHくん、「これはママ、これはおばあちゃん…」おいもを一本ずつ数えているAちゃん、細いおいもを何本も大事そうに袋に入れている年少組のMちゃん、さすが年長組のお兄さんお姉さんたちは、袋もはちきれんばかりにつめ込んで、「重い、おもい」とズルズル引きずり乍らなおも掘っているそのたくましさ。ここ袖ヶ浦のびろ学園のおいも畑では、さまざまなドラマが展開されました。すこやか学園では毎年、のびろ学園のお兄さんお姉さんが育てて下さったおいもを掘らせて頂いています。今年もその季節がやってきました。お天気も上々、巷では不作だという声が多い中で、ここでは大きなおいもがゴロゴロと大豊作でした。そんなおいもを掘り当てた時のみんなの顔は、今日の太陽のように輝いていましたっけ。たくさんのおいもと、楽しい一日をありがとう。（金井玲子）

〈袖ヶ浦〉

行事係を振り返って

袖ヶ浦の両学園の数ある係りの中で、出来れば遠慮したい、恐らく誰もがそう思っているものの一つに「行事係」があります。それでもいざ自分がやることになってみると、「よし、やってやろうじゃないか！」と、結構意欲が湧くものです。

当初、いくつかの目標を立てました。その中でも、利用者・指導員の誰もが少しずつでも関わって創り上げていく行事、が今年の大きな基本のテーマであったと思います。しかしながら現実的には、こちらの意図を正確に伝えていくのは難しいもので、「行事係は楽をしようとしている」と言われたり、「こんなことなら自分でやってしまったほうが余程正確で速い」と思ったりもしましたが、誰のため、の何のための行事なのかを考えると、やはり多くの人に参加してもらいたいと考えました。どうせやるなら、外で見ているよりも一緒に創っていく方が絶対に楽しい、という思いがあり、それは、石井所長といえども例外ではなく、太鼓を叩くことや、準備運動など、いろいろな事をお願いしました。

いくつかの行事が進んでいくと、仕事を頼んだ新人職員から「案が出なくて泣きたい思いもしたけど、実際に関わって分かったことがたくさんあって良かった。」と言われたり、利用者が「またやろうね」と言ってくれたりすることが、どんなにうれしく励みになったこと

か。

私たちも行事係を通して発見したことがたくさんあります。一年間良い経験をさせてもらえたという充実感があります。一度はやってみて良い「行事係」だ、と今は言えますが、出来る事なら二度めは遠慮したいのが、やはり行事係です。

（永田りつ子）

〈赤塚・高島平〉赤塚福祉園『成人の祝い』

我が子の「『成人の祝い』の日を迎え、昔苦労が絶えなかったことを思い返すと、胸がいっぱいになります」と目頭を熱くされる保護者の姿がありました。

「ネクタイを締めるのは初めてなんですけれど、いやがらず、我慢しています。この子も大人になったようです」と、笑顔で語る保護者の姿もありました。

厳粛な雰囲気を醸し出した赤塚福祉園の『成人の祝い』には、成人の仲間入りをした利用者とその保護者十六組の様々な顔がありました。

新成人となった利用者たちが、どれほど「大人」「成人」を意識しているかは、定かではありません。しかし、式典の稟とした雰囲気と、それに相応しい服装、そして、保護者の熱い眼差しと想いに触れて利用者はそれぞれ、周囲からの期待やその想いを胸に刻み込んだことでしょう。

この大人の想いや期待に、利用者が如何に応えるか、そして、前述の「状況」を如何に認知して、それに即した行動を起こせるか、ということも今回の式典のポイントでありました。つまり、私たちは、この式典をひとつの課題状況と見なして、人の想いや期待に応え、状況に沿って、悦びや自信というものを利用者に体験してもらおうと試みたのです。

今回用意した催しの次第は、次の通り。祝辞－お茶会－記念植樹－手作りダルマの開眼式。この中でも、私たちが課題のメインとしたのがお茶会です。

茶道の名取の免状をお持ちになる町田先生のお導きによって、各利用者は茶の作法に則り、そして、介助役の職員を良く観て、落ち着いて、濃い茶をすすったのです。

（白石雅一）

高島平の『宿泊指導』

11月18、19日に行われた宿泊指導のメインイベントはディズニーランド行、そして、当日はどう過ごすかについて、利用者自身が関与して綿密な計画を立てることを大切に考えました。

五丁目福祉園には、まだまだ社会的な状況に馴染めなかったり、不安を感じ易い人もいますが、興味や関心のはっきりしている人、あるいは主体的に関与したいと感じている人もいます。彼らは、職員が行事のお膳立てをしてしまうと、〝お仕着せ〟と感じ、せっかく育ってきた主体性の芽を摘み取ってしまうことになり兼ねません。そこで、自分たちの手でスケジュールを組むという作業を通して主体的な面を伸ばし、同時に時間やお金、他の人の事情、そして自らの障害といった避けては通れない多くの制約にどう対処してくれるのかという難問も投げかけてみました。

グループ別の打ち合わせでは、乗り物やアトラクション、昼食場所の選定、買い物の希望や意見が飛び交いました。皆が現実に直面して「もっと時間が欲しい！」と不満もちらほら。でも、自分の希望を少し我慢して、皆の希望を取り入れて何とか一日で消化可能なスケジュールが出来上がりました。

当日、行徳ステーションホテルを後にいよいよディズニーランドへ。本番にアクシデントは付物。それぞれの思いが強いだけに、期待を裏切らないか冷や冷やする面も多々ありました。でも慌ただしく終わった一日を「こんなに楽しい行事は初めてだ！」と皆が感じてくれました。自分自身が主体的に関与した楽しさをいつまでも胸に刻んでいてほしいと思います。

（北川　裕）

思い出に残るディズニーランドの一日

ひかりのタイムス

独立第21号

ひかりのタイムスは、嬉泉広報責任者の友田氏がアドバイザーで、利用者の山岸が編集長をしています。

強度行動障害棟の指導を沼倉先生に聞く。

山岸「これを設置した目的は」
沼倉「厚生省から強度行動障害特別処遇事業を委託されたから」
山岸「利用者の年齢は」
沼倉「１９才から２２才　ちなみに男２人女２人」
山岸「指導方針は」
沼倉「強い行動障害をおこさないでも過ごせるようにして３年後に家庭や地域の施設で暮らせるようにする事」
山岸「日課は」
沼倉「お仕事してる人が１名。３名は散歩・買い物・個別指導などをしてそよかぜ組と一緒に活動している。」
山岸「今後はどういう指導をしていくのか」
沼倉「人間関係をうまく出来るような関わりを多く持っていきたい」
山岸「事業をやってみての感想は」
沼倉「事業については、始まったばかりなので、３年後の利用者の受入れ先が心配だ。利用者については、激しい行動障害を持っているが、それぞれ個性的でよい面もたくさんあるので（キチンとした仕事が出来るとか、活動に対して積極的だとか）そういった事を一緒にやりながらこちらも学ばせて貰ってる」
山岸「ログハウスの木のテーブルや椅子はなぜ？」
沼倉「雰囲気が暖かい感じと壊れなくて丈夫な椅子やテーブルという事でログハウスの木のテーブルの特注品にした。」
山岸「奥の部屋は何ですか」
沼倉「落ち着いて作業指導が出来る部屋として設置した。ちなみに職員の詰所は特殊アクリル板のガラスではずれないし、割れない。
　過去のそよかぜ組の指導で得た教訓を生かして、この強度行動障害棟を作る段階でキメの細かい工夫を、配置する物品のすみずみまでほどこした」
山岸「食事はどこでしますか」
沼倉「そよかぜ食堂でしている」
山岸「あのテレビにドアーがあるのはなぜ？」
沼倉「最初テレビを壊す利用者がいる事を想定して作った。でも幸か不幸かこなかった」

山岸棟内を見て回る

山岸「全館冷暖房ですね」

沼倉「上にエアコンがついている。エアコンは過去の経験で利用者がいじるので上にした。床はのびろでは壊れやすく故障する。その経験から、床も硬くして壊れない強化板を敷きその下に床暖房を引く。
　トイレは広くして職員が一緒に対応出来るようにした。風呂は広くてゆったりとして落ち着いて入浴出来るようにした。居室ははやて組以外の人も利用する事もあります」
山岸「はやて組の由来は」
沼倉「石井所長の命名で疾風の如く処遇するようにとの由来」

感　想

　強度行動障害棟は、利用者が暴れて職員が苦労するイメージがあったが意外に落ち着いてる。奇麗で広い。明るい陽射しが棟内を降り注いでる。
　ゆったりとした建物にハイテクの設備が取り入れられてる。温度計が居室に設置されている。
　ログハウス風の建物で利用者の落ち着いた態度と職員が余計な刺激をしないように静かに対応している。全体の印象として別荘みたいな感じがした。